

労働映画百選通信 No.12 2016.11

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

日本の労働映画百選 <http://hatarakubunka.net/>

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで!“働く姿”を描いた百本をセレクト

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意義と喜びをどのように描いてきたのか。働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から百本を選びました。

特定非営利活動法人 働く文化ネット・労働映画百選 選考委員会

明治の日本／川崎三菱労働争議／何が彼女をそうさせたか／第十二回東京メーデー／隅田川／生れてはみたけれど／有りがたうさん／戦ふ兵隊／煉瓦女工／機関車C57／或る保姆の記録／わたし達はこんなに働いてゐる／霧進／炭坑／われら電気労働者／海に生きる／白雪先生と子供たち／どっこい生きてる／生きる／おかあさん／1952年メーデー／女ひとり大地を行く／蟹工船／京浜労働者／太陽のない街／立ち上がる女子労働者／ここに泉あり／赤線地帯／喜びも悲しみも幾歳月／ボタ山の絵日記／雪と闘う機関車／にあちゃん／海に築く製鉄所／刈り切り唄／年輪の秘密大いなる旅路／裸の島／1960年6月 安保への怒り／西陣／キューボラのある街／その場所に女ありて／ある機関助手／ドキュメント 路上／68の車輪／こころの山脈／若者たち／農業禍／和賀郡和賀町／黒部の太陽／太陽の王子 ホルスの大冒険／男はつらいよ／シッパードの青春／家族／戦争と人間 三部作／友子儀式／日本の稲作／詩人の生涯／トラック野郎 御意見無用／どっこい！人間節／日没の印象／男たちの旅路／日本の戦後／あゝ野麦峠／ザ・サカナマン／遠雷／海峡／原発はいま／魚影の群れ／ガン・ホー／マルサの女／母さんが死んだ／魔女の宅急便／あーす／月はどっちに出ている／踊る大捜査線／鯨捕りの海／鉄道員 ぼっぼや／人らしく生きよう 国労冬物語／こんばんは／県庁の星／フラガール／三池 終わらない炭鉱の物語／ハゲタカ／ハケンの品格／おくりびと／フツの仕事をしたい／ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない／任侠ヘルパー／孤高のメス／昭和の家事／サウダーチ／舟を編む／ある精肉店のはなし／ダンタリン 労働基準監督官／WOOD JOB！／紙の月／夢は牛のお医者さん／昼めし旅／種まく旅人 くじらみみの郷／下町ロケット

労働映画鑑賞会 第33回 2016年11月10日(木)18時から (プログラムは次ページをご覧ください)

会場◎連合会館(地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ) 参加費無料・申込不要

【上映情報】労働映画列島！11月 ※《労働映画列島》で検索！ <http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00161103>

◎新作ロードショー

ブリジット・ジョーンズの日記 ダメな私の最後のモテ期 《10月29日(土)から 東京 TOHOシネマズ日劇ほかで公開》
恋に仕事に奮闘する独身女性の日常を描き大ヒットしたシリーズ第3作。テレビ局のプロデューサーとして活躍するヒロインが、二人の男性の間で揺れ動くラブコメディ。(2016年 イギリス 監督/シャロン・マグアイア) <http://bridget-jones.jp>

インターン！ 《11月5日(土)から 東京 シネ・リーブル池袋ほかで公開》

企業が取り入れている「インターンシップ」制度をテーマに、大学三年生が自分の可能性に気づきながら成長していく姿を描く。(2016年 日本 監督/吉田秋生) <http://intern-movie.jp/>

小さな園の大きな奇跡 《11月5日(土)から 東京 新宿武蔵野館ほかで公開》

香港での実話を基にした感動ドラマ。エリート教育の実態に疑問を抱いた女性が、閉園の危機にあった幼稚園の立て直しに乗り出す。(2016年 香港=中国 監督/エイドリアン・クアン) <http://little-big-movie.com/>

◎名画座・特集上映

【東京 ポレポレ東中野】10/29～11/18「東海テレビドキュメンタリーの世界」…長良川根性／ヤクザと憲法／他

【東京 船堀シネパル】11/5・6「第8回 船堀映画祭」…その場所に女ありて／海角七号／悪名／網走番外地／他

【東京 神保町シアター】11/5～18「知られざる独立プロ名画の世界」…荷車の歌／どっこい生きてる／ともしび／他

【東京 飯田橋 ギンレイホール】11/12～25 これが私の人生設計／ブルックリン(2本立)

【川崎市市民ミュージアム】11/3～27「川崎ゆかりの映画人」…大阪の宿／西銀座駅前／異邦人の河／他

【青森県立美術館】11/18～20「川島雄三と岡本喜八」…洲崎パラダイス 赤信号／独立愚連隊／雁の寺／他

【山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー】11/18・25「台湾、先住民と私」…テラキスの帰郷／酒祭の男たち／他

【新潟 シネ・ウインド】11/12～25「シネ・ウインド31周年祭」…オネアミスの翼／大地を受け継ぐ／黒い暴動／他

【岐阜ロイヤル劇場】11/12～25「これぞ男の美学 三船敏郎傑作選」…日本海大海戦／無法松の一生(1958年版)

【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】10/15～11/18「名画発掘シリーズvol.6 監督・番匠義彰」…抱かれた花嫁／橋／他

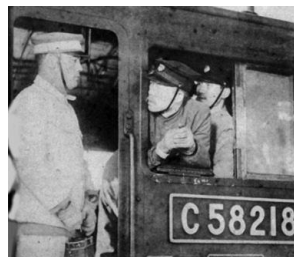
【高知あたご劇場】11/5～9「映画でみる日本の復興期」…戦争と平和／安城家の舞踏会／蜂の巣の子供たち／他

【福岡市総合図書館 シネラ】11/2～27「原節子特集」…河内山宗俊／青い山脈／めし／智恵子抄／秋日和／他

【鹿児島 ガーデنزシネマ】10/29～11/4「鹿大×コミシネPROJECT」『鉄道員 ぼっぼや』(1999年 監督/降旗康男)

【作品ガイド】『指導物語』 文:波多楽久

1941年/107分/白黒 製作■東宝映画 原作■上田広 監督■熊谷久虎
 脚色■沢村勉 撮影■宮島義勇 音楽■スメル音楽研究所
 出演■丸山定夫 藤田進 原節子 北沢彪 中村彰
 《鉄道省出身の上田広の小説を映画化。定年間近の老機関士が、陸軍鉄道部隊の新兵の指導を任せ、彼を厳しく鍛えていく日々を描く。》



「最右翼」と「最左翼」が団結した(?) 鉄道映画の傑作

今年8月、東京・神保町シアターの特集「鉄道映画コレクション」で、ようやく見る事ができた。劇場公開日は昭和16年10月4日。日米開戦の2か月前という時期で、「銃後」の生活はどうあるべきかを、鉄道員とその家族の物語として描いている。蒸気機関車のベテラン運転士役には、新劇出身の丸山定夫。4年後の8月6日、移動演劇「櫻隊」を率いて滞在中の広島に原爆が投下され、団員8人とともに亡くなった。一家の長女役には、義兄にあたる熊谷監督の勧めで映画界入りした原節子(当時21歳)。鉄道部隊から研修に来た新兵役には、その後、黒澤明のデビュー作『姿三四郎』(1943)で脚光を浴びる藤田進。結果的にこの時代を象徴することになった3人が共演している。

物語は実にシンプル。鉄道部隊の兵士が蒸気機関車の運転を習得し、部隊が前線へと旅立つ場面で終わる。機関車を効率良く走らせるための「炭投」の作業など、運転台での仕事内容が詳細に描かれる。運転士は若い新兵を厳しく指導するが、乗務が終われば息子のように可愛がる。また、一緒に研修に来た新兵(中村彰)は大学出の秀才で、かつて「思想的な問題」で睨まれた過去があることもわかる。こうしたエピソードの数々に、昭和16年当時の庶民の暮らしや、世間の「空気」がうまく映し出されている。

映画の見どころは、なんとといっても本物の蒸気機関車を使った走行の場面だ。千葉機関区が撮影に全面協力したそうで、佐倉駅付近の総武線・成田線の並走区間を使った、2台の機関車が競争しながらカメラに向かってくるショットなど、迫力満点の映像がたっぷり(YouTubeで検索すると動画が見られます)。監督の熊谷と撮影の宮島義勇のコンビによる息の合った仕事の賜物だが、熊谷は国粋主義思想の「スメラ学塾」に参加し、映画界でも「最右翼」と目された人物。一方の宮島は戦後の「東宝争議」を主導し、その後、日本共産党書記局でも活躍した映画界の「最左翼」。両極端の二人が「団結」しているという事実も面白い。

『人間の条件』(1959~61、監督・小林正樹)、『若者たち』(1967、監督・森川時久)など、日本映画史上の名作を数多く手掛け、「宮島天皇」の異名を持つ大御所となった宮島だが、晩年は国鉄分割民営化に反対する「動労千葉」の闘いに共鳴し、自費で『俺たちは鉄路に生きる!』(1986)などの記録映画を作って支援した。半世紀前に現場を共にした、千葉の鉄道員たちの姿を思い出していたのかも知れない。

NPO法人 働く文化ネット 労働映画鑑賞会 【2016年10~12月期】 統一テーマ:労働映画のさまざまな視点
 第33回 ~手わざの誇り、不安と悩み~

- ・開催日:2016年 11月 10日(木) 18:00~(開演が30分早くなります!)
- ・会場:連合会館 201会議室(地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)
- ・上映作品:

(1)「年輪の秘密」より2編【労働映画百選 No.35】

1959~60年放送のテレビ・ドキュメンタリー。日本各地に伝承されている名人芸や職人芸の中から、ふたつの記録作品をとりあげます。

浮世絵の復刻(彫り師と摺り師) 1959年/17分/白黒

製作■岩波映画製作所 演出■秋山稔一 撮影■今野敬一

鳶(とび) 1959年/17分/白黒 演出■田中実 撮影■金宇満司

(2) 西陣 1961年/26分/白黒 【労働映画百選 No.39】

伝統産業に働く職人たちの、仕事に対する不安や悩みを描く。映像詩的実験映画。

製作■京都記録映画を見る会 浅井栄一 脚本・監督■松本俊夫 脚本■関根弘
 撮影■宮島義勇 音楽■三善晃 語り■日下武史 能■観世栄夫

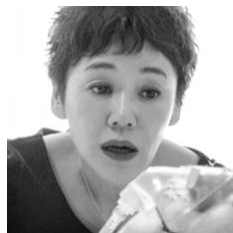
第34回は12月8日(木)18:00から、「労働映画の源流を求めて」と題して、『明治の日本』(1897-99年)【労働映画百選 No.1】と『隅田川』(1931年)【労働映画百選 No.35】の上映を予定しています。



西陣

【労働映画のスターたち】第12回「大竹しのぶ」 文：百永良武

「野麦峠」から「後妻業」まで！可憐でオカンなファミ・ファタール



後妻業の女(2016)



青春の門(1975)



あゝ野麦峠(1979)



かけおち'83(1983)



家政婦・織枝の体験(1985)



いこかもどろか(1988)

8月下旬に公開された『後妻業の女』(2016/監督・鶴橋康夫)がヒットしている。高齢者の遺産を狙った犯罪“後妻業”を題材としたこの作品、黒川博行による原作小説は関西で実際に起きた連続不審死事件をモチーフに描かれ、その生々しさが話題を呼んだ。一方の映画版は、読売テレビ時代から男と女の愛憎をスタイリッシュな映像で描くことで知られるベテラン・鶴橋監督が、大阪独特のブラックな「人間喜劇」に仕上げた結果、最近の日本映画では珍しい、大人向けのピカレスクロマンが誕生した。

《鶴橋新喜劇》の座長を務めたのは、来年還暦を迎える大竹しのぶ。デビュー当時は彷彿とさせるあどけない表情で可愛らしさをアピールしたと思ったら、0.5秒後にはドスの効いた声で毒を吐いている。彼女が表と裏の顔を使い分けて「後妻業」に勤しむ可笑しさが最大の見どころで、映画館に来るのは久しぶり…という感じのお客さんが詰めかけて、彼女のモンスターぶりにゲラゲラ笑っているのはなかなか楽しい光景だった。「人生は近くで見ると悲劇だが、遠くから見れば喜劇である」と言ったのはチャップリンだそうだが、再婚相手を次々と「送り出す」世にも恐ろしい事件を、ここまで突き抜けたエンタテインメントにするには、自らの人生でも様々な「悲劇＝喜劇」と向き合ってきた《大竹しのぶ》という存在が不可欠だったと思う。真冬の野麦峠を越えて「百円工女」を目指すのも、寂しい男たちの心を癒し、その報酬として彼らの資産をいただくのも、「遠くから見れば」あまり違いはないのかも知れない。女優生活40年余、清楚な乙女から魔性のおばさんまで演じてきた「小さな大スター」の足跡を、労働映画の視点から辿ってみよう。

1957年、東京・品川区生まれ。幼い頃に父が結核となり、療養のため埼玉県のと田園地帯に移り住んだが、ここでのびのびとした少女時代を過ごしたことから、内気な性格が活発になったという。高校生の時、フォーリーブス・北公次のテレビドラマでの相手役に応募して演技の世界へ。1975年、映画『青春の門』(監督・浦山桐郎)での主人公の恋人・織江役と、NHKの朝の連続ドラマ『水色の時』のヒロイン役が相次いで決まり、高校在学のまま一躍新進スターとして脚光を浴びる。『キューポラのある街』(1962)などで女優の発掘・育成に定評のある浦山監督は、まだ無名の大竹を抜擢する前に幾度も面接を行い、彼女の生い立ちを詳しく聞き取ったという。記者会見で監督は、一見平凡な少女を重要な役に起用した理由として「普通の人間としても、社会の中できちんと生きていける子です」と語った。この「普通の人間」というキーワードは、大竹のその後の人生にも大きな影響を与え続けていく。

純情可憐、どこことなく土の匂いがしそうな佇まいが幅広い年齢層の人気を集め、デビュー直後から映画、テレビの大作に次々と出演する。社会派エンタテインメントの巨匠・山本薩夫監督の『あゝ野麦峠』(1979)は、明治中期の製糸工場での過酷な労働の実態を、リアリズムに徹して描いた名作。貧しい一家のために懸命に働き、優秀な「百円工女」となって故郷に凱旋したのも束の間、健康を蝕まれ、あつけなく命を落とすヒロインは、近代日本の女性像として不滅の存在となった。この役もまた、撮影当時21歳の大竹しのぶでなかったら、全く違う作品となっていたかも知れない。

1982年、TBSのドラマディレクター・服部晴治氏と結婚。清純なイメージの若手女優が、17歳年上で離婚歴のある男性と……ということで、世間からはスキャンダラスに受け止められたが、本人にとっては「普通の人間」として幸せを求めた結果だった。大竹は「良い妻」を目指して慣れない家事に奮闘し、ドラマでも夫婦の共同作業で、シングルマザーの家政婦が様々な家族と出会っていく『家政婦・織枝の体験』(1985～86)という珠玉作を生み出した。

しかし、服部氏は結婚後まもなく癌が見つかり、長男誕生後の1987年に亡くなる。僅か5年の結婚生活の間、妻として多くの悲しみを味わう一方で、女優としては、つかこうへい脚本のドラマ『かけおち'83』(1983/NHK)以降、コミカルな役も得意とする個性派に成長した。明石家さんまとの丁々発止の掛け合いが人気を呼んだドラマ『男女7人夏物語』(1986/TBS)、映画『いこかもどろか』(1988/監督・生野慈朗)などで、颯爽と生きるヒロイン像を確立していく。悲しみと笑いが同時進行する日々を経て、90年代からはいよいよ、女優としての実力を遺憾なく発揮していくことになる。

《次頁へ続く》

若手も大御所も魅了する「魔性のオンナ」と「肝っ玉かあさん」

1988年、共演が続いていた明石家さんまと電撃結婚。翌年に長女が誕生するが、出産後、大竹の仕事への復帰をめぐって、ふたりの考えにズレが生じてきたという。育児と家事に追われながらも、女優を続けたいと願う妻、それに賛同しきれない夫。夫婦は互いに「束縛」することに疲れ果て、結婚生活は4年で終りを告げた。

そんな時期に出演した映画が『死んでもいい』(1992/監督・石井隆)で、流れ者の青年(永瀬正敏)に一目惚れされたことから、運命を狂わせていく人妻に扮した。夫(室田日出男)を交えた三角関係は、やがて流血の惨劇を招いてしまう。全ては青年の身勝手な恋心が巻き起こした事件なのだが、彼をそこまで駆り立てた人妻にも「原因」があることを、大竹が絶妙なニュアンスで演じている。それまでゴシップ的に囁かれてきた「魔性のオンナ」としての魅力が一気に開花し、『女優・大竹しのぶ』の新境地を拓いた作品となった。

(デビュー作『青春の門』の脚本家・早坂暁氏は、彼女のファム・ファタール的な個性を「食虫植物」と形容したが、当人に悪意のない点を踏まえた名批評だと思う。)

40歳前後からの出演作には、彼女自身の生き方を投影するような「女手ひとつで」仕事と子育てに奔走する役柄が目立ってくる。ドラマ『Dearウーマン』(1996/TBS)では、大手企業の庶務課に「セクハラ対策担当」として再就職した元キャリアウーマンの役。シングルマザーであることを理由に採用を断られ続けてきたため、息子がいることは同僚にも内緒にしているが、職場の女性たちが被る様々な不条理には敢然と立ち向かっていく。毎回、傲慢な男性社員たちに威勢良くタンカを切る場面が、番組の名物となった。

山田洋次監督の『学校III』(1998)では、勤め先のリストラで失業し、職業訓練校でボイラー技工士の資格を取ろうと頑張る未亡人。夫を過労死で亡くした後、小児自閉症の息子との二人暮らし。様々な事情を抱えて訓練校に集まった男たちとともに学ぶ日々の中で、会社と家族の両方に見捨てられた元エリート社員(小林稔侍)と出会い、ほのかな恋心を芽生えさせる。社会の片隅で懸命に生きながら、ささやかな幸せを見出すヒロインの、穏やかな佇まいが心に残る。

シングルマザーと不良息子の関係を描いた映画『キトキト!』(2007)の吉田康弘監督は、公開当時28歳。母親の再婚話を娘の視点から描く『オカンの嫁入り』(2010)の呉美保監督は33歳。親子ほど年の離れた若手作家の作品では、どこことなく危なっかしい生き方ながら、自らの選んだ道を突き進む「肝っ玉かあさん」を演じている。トーク番組で「本当に私は、子どもたちに育てられてきましたね」と語っていたが、こうした作品での子どもとの会話は、本物の家族同士のキャッチボールのように自然で心地よい。

日本映画界の最長老・新藤兼人監督が98歳で挑んだ最後の作品『一枚のハガキ』(2011)もまた、大竹しのぶ抜きでは成立しなかつただろう。新藤は長年行動を共にしてきた妻・乙羽信子に先立たれ、創作意欲を失いかけたが、生前の乙羽が共演経験のある大竹を推薦したことを思い出し、『生きたい』(1999)、『ふくろう』(2004)と作品を重ねて復活を果たした。「日本人と戦争」を描き続けた新藤の最終作は、戦争に夫を奪われた農家の嫁が、力いっぱい泣き、怒り、打ちのめされ、やがて立ち上がるまでの物語。小さな身体に悲しみと恨みのマグマをみなぎらせたヒロインは、戦争に翻弄された日本の女性全員の代弁者となった。

膨大な仕事を駆け足で眺めてきたが、この他にも、終戦前後の作家・林芙美子を演じた『太鼓たたいて笛ふいて』(2002年初演/作・井上ひさし)をはじめとする数々の舞台や、ラジオドラマ、音楽活動、エッセイなど、注目すべき作品は枚挙に暇がない。乙女の可憐さとオカンのたくましさ、そして男も女も惹きつける「魔性」を併せ持つ稀有な存在となったしのぶさん。60代に入ってから、従来の「シニア世代」に収まりきらないキャラクターを作り出し、見る者をアツと驚かせてくれることを期待しています。

(参考文献「私一人」大竹しのぶ・著 幻冬舎 2006年)



死んでもいい(1992)



Dearウーマン(1996)



学校III(1998)



キトキト!(2007)



オカンの嫁入り(2010)



一枚のハガキ(2011)